とある男のＩＳな話

ぱりお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある男のＩＳな話

【Ｎコード】
Ｎ２９８３Ｚ

【作者名】
ぱりお

【あらすじ】
伊波涼太はどこにでもいる中学3年生の男の子。しかし、ある交通事故に巻き込まれ、早すぎる死を迎えてしまう。そして次に目覚めた場所は天国ではなくどこかの研究所。
そこでであったのがＩＳの登場人物篠ノ之束と量産型ＩＳ打鉄であった。
涼太「ありえない。こんなことあるわけない・・・。」
そんな伊波涼太を交えたちょっとおかしいＩＳストーリーが今始まる。

作者の初投稿作品です。よろしくお願いします。
それと作者はアニメと二次創作での知識しかないので、そこのところもよろしくです。

プロローグ（前書き）

がんばります！

プロローグ

プロローグ

―――ドオオォォン！！

その音とともに俺は宙に投げ出された。

「（あぁ、死んだな。）」

直感的にそう思った。

＊

その日、俺こと伊波（いなみ）　涼太（りょうた）は上機嫌だった。なんせ2年間俺の片思いだと
思い込んでいた女の子にいきなり告白されたのだから。もちろんＯＫした。即効でＯＫした。

しかも「これから涼太くんってよんでもいい？」って
上目遣いで聞かれたときには死んでもいいって思ったよ。いやむしろ萌え死ぬところだった。

神様ありがとう！いるって信じてないけどありがとう！

ラブラブな俺達は手を繋ぎながら下校した。やべぇ俺今人生で一番幸せだ。

彼女と喋りながらそんなことを思う。だが楽しい時間ほどすぐ過ぎる。彼女の家に着くのはあっとゆう間だった。

「ばいばい涼太くん。また明日ね！」

花の咲いたような笑顔で手を振る彼女。手を振りかえし、家に入っていくのを見送る。

・・・・ちくしょうかわいすぎるだろ！俺を殺す気かよくそっ！

ニヤける顔を両手で押さえながら歩き出した。あ、そういえばとあることを思い出す。

「小説買いにいくの忘れてた。」

帰りに買うはずだった小説のことをすっかり忘れていた。家に帰る前に本屋に行こう。ここからそう遠くないはず。

＊

5分くらい歩き本屋のある大通りに出た。近くの公園では子供達が

サッカーをして遊んでいる。
楽しそうだなとおもいながら公園の横を通りすぎる。
そういや小さいときよくここでサッカーしたな。俺超へたくそだったけど・・・。
あのころディフェンスしかやらしてもらえｎ『プーーーーーーーーーーーー』な、なんだ？

音の聞こえたほうを見ると公園にいた一人の男の子がボールを追って道路に飛び出していた。
トラックの運転手はあわててブレーキを踏んだがもう手遅れのようだ。そのまま男の子に突っ込んで行く。

―――危ないっ！！

考える前に体は動いていた。全速力でその場に向かい男の子を突き飛ばす。直後に、俺はトラックに吹き飛ばされた。そして、地面に叩きつけられ血を吐き出す。

「ぐはっ！！・・・はぁ・・・はぁ・・・」

なんとなくわかった。死ぬんだろうなぁ俺。なんだか呼吸しにくいし。

それはそうと男の子をほうを見る。泣いているが無事のようだ。
よかった・・・。仰向けになり空を見る。むかつくほどきれいな青空だった。

神様の・・・くそったれ・・。

そうつぶやきながら、意識を手放した。

第1話　トリップしちゃいました。（前書き）

一応なんども読み直していますが、誤字などあるかもしれません。

それでも大丈夫な方はどうぞー！

第1話　トリップしちゃいました。

ｓｉｄｅ　？？？

ここをこうして、ここは・・・こうかな。え・・あれぇ？あーやっぱりワンオフアビリティの容量が大きいせいかなー・・。それに腕パーツのせいで全体のバランスがおかしいかも。うむむ・・・・『緊急事態発生。緊急事態発生』へ？

『侵入者を発見』

侵入者！？ここがばれたって言うの？でもどうやって・・・。

『現在、ＩＳ保管庫にいる模様』

私を捕まえにきたのかな？それともＩＳの技術を奪うため？どっちにしろ私の研究を邪魔するなんて、いい度胸だね！
どんなやつか顔をみてやろう、そしてココに来たことを後悔させてあげるよ。私は保管庫に向かった。

中に入ってみるとそいつは床に倒れていた。どうやら気絶しているようだ。勝手に人様の家にあがりこんでおいて何がしたいんだろうこいつは・・・。

あ、起きた。周りを見渡しているようだ。いっくんと同じ年位の子かな。まあ関係ないか、そんなの。

「ねぇ、君。勝手に家に上がりこんで何をしているのかな・・・」

どうせ始末するんだしね。

＊

side　涼太

「・・・た！・・・うた！」

・・・。

「・・ょうた！・・・きなさい！」

ん。母さん？もうちょっと寝かせてくれよ・・・。

「何言ってるの！早く起きないと遅刻するわよ！」

・・・あーもうわかったよ。朝から大声だすなって。

まだ眠いが母さんがうるさいので起きる事にする。だいたい今何時だよ。目を擦りながら部屋の時計を見る、ってあれ時計がない。

それどころか自分が寝ていた場所は鉄板の床だった。なんで俺こん

なとこに・・？必死に寝る前のことを思い出す。

たしか、昨日は2年間片思いだと思ってた子に告白されたんだったよな！もちろんｏｋして、そのまま一緒に下校。家まで送って・・・。小説買い忘れたの思い出して、本屋に行って、その途中の公園でサッカー・・ん？・・・サッカーやってた子供が・・・！？？！？？！！？！？

そうだ思い出した！俺トラックにひかれたんだ！じゃあココは病院か・・・？いやいや、病院がこんなメタルチックな場所であってたまるか。てか工場にしか見えないし。周りを見回してみると、ロボットのようなものが目に入った。

！？　あれってもしかしｔ「ねぇ、君。勝手に家に上がりこんで何をしているのかな・・・」

突然誰かに話しかけられた。声から察するに女性だろう。でもなんだろ。この声、どこかで聞いたことがあるような・・・。そんなことを思いながら、うしろを振り向く。

え・・・？

いやいやいや・・・ありえない。こんなことあるわけない。

「篠ノ之　束・・・？」

だってそこにいたのは俺がはまっていたアニメ【インフィニット・ストラトス】にでてくる登場人物　篠ノ之束（しのののたばね）だったのだから。

第一話　トリップしちゃいました。

「それで、君はなんでココにいるのかな？」

いや、まて本物の篠ノ之束なわけないだろ。なに考えてんだ俺。きっとコスプレしたそっくりさんに決まってる。そうだ。絶対そうだ、ハハハばかだな俺！・・・落ち着けよ。

「い、いやあの、自分もなんでココにいるのかよくわかってなくて・・」

本当のことだ。嘘はついてない、けど・・・。

「そんなデタラメ束さんが信じると思ってるの？」

うわ、めっちゃなりきってる。声も超にてるし。ってそんなことはどうでもいい！

やっぱ信じてもらえないか・・・。とりあえず事情を話してみよう。なにも言わないよりマシな気がする。

「ほ、本当なんです！実は――――」

「・・・トラックに轢かれて死んだとおもったら、ココで寝てた？つくならもっとマシな嘘にしなよ」

「嘘じゃないんですってば！？」

イラついているご様子。あれ、これ逆効果だったんじゃ・・・。

「じゃあ君は自分の家に不法侵入してきたヤツに『気付いたらココにいました』なんて言われてソレを信じられるの？ねぇ」

「そ、それは・・・」

無理だ。信じられるわけがない。迷わず警察に通報するに決まってる。

「もういいよ。どうせ君はココで死ぬんだから」

「ちょ！！な、なんで！？」

「当然でしょ？束さんの秘密の研究所を見られちゃったんだから。このまま返すわけにはいかないよ」

――――カチャ。

女が銃を構える。俺は驚いて腰を抜かしてしまった。そりゃびびるだろ。銃口向けられたのなんてはじめてなんだから。

「私も本当はこんなことしたくないんだけど、居場所を知られるとめんどーな事になっちゃうから、しょうがないよね？」

しょうがなくねーよ。他に方法なんていくらでもあんだろ！監禁とかさ！・・・どっちもいやだけど！

女はじりじりと俺との距離を詰めていく。腰が抜けて立てないので、手で体を支えて後ろに下がる。

が、背中に何か当たった。たぶん壁だろう。

「（はぁ・・・せっかく生きてたのになぁ・・・）」

俺は覚悟を決め、目をぎゅっとつぶる。直後に銃声、ではなく後ろで何か音がした。

――――――キュィイイイン！

な、なんだ？

「まさか・・・反応してる！？でも彼はどう見たって男性だｓ・・・ブツブツ・・」

女がなにかつぶやいている。何をブツブツ言っているのか気になったがとりあえず後ろで動いている何かを確認することにした。

「ま、マジかよ・・・」

そこには同じくアニメ【インフィニット・ストラトス】に出てくるＩＳ”打鉄”が置いてあった。

さっきチラっと見えたけど、やっぱそうだったのか・・。じゃあ目の前のは本物の篠ノ之束で、ここはＩＳの世界ってか！？せっかく冷静になれたのにまたパニくってきた。ありえねえぇえええええ！？

「ねぇ君」

「（どうしてこうなったあぁぁぁぁ）・・・へ？」

「じつは女の子だったりする？」

「んなわけねーだろ！どう見ても男だろーが！！」

あ、やべぇ。パニくり過ぎて口調が・・・。お、怒ってない、よな？

「やっぱり男性か・・・でもそしたらどうして・・・ブツブツ・・」

よかったー怒ってないっぽい。女は一通り悩んだ後、また俺に質問する。

「君。名前は？」

「伊波。伊波涼太、です」

どうしたんだ？いきなり名前聞かれたけど、もしかして殺されずにすむんだろうか・・・。

「そう。じゃあ伊波。君に２つの選択肢をあげよう！」

なんかいきなりテンションあがってるぅ・・・。ん？選択肢？

「1！ココでおとなしくやられる」

ふざけんな。いやに決まってる。

「2！ココで私の研究をお手伝いする」

・・・・・は？

「・・・・・2で」

「おっけー。じゃあこれからよろしくね！伊波」

「ま、まってください。なんで急に気が変わったんです？」

不気味すぎる・・・なにか企んでるのか。

「ん？あーそれはね、君が世にもめずらしい、男性でＩＳを動かせる人間だからだよ！」

・・・そーゆーことか。つまりあれだ、モルモットになれと。正直嫌だけど死にたくないしなー・・・はぁ。

「でも、いいんですか？得体も知れない俺に研究の手伝いなんかさせて」

「問題ないよ。今から君にはこれをつけてもらうから」

と言ってなにかを腕に取り付けられた。・・・腕輪？

「伊波がなにかしようとしたらそれが手首をスパーン！だから大丈夫っ！」

大丈夫じゃねぇ！？なに笑顔で物騒なことといってんのこの人！？外れろ！この野郎！！スパーンなんて嫌だ！！！

「これからよろしくねっ！」

「・・・よろしくお願いします」

ホント・・・神様のくそったれが・・・ｏｒｚ

第2話　その後の日常（前書き）

主人公は仲良くなるとすぐ調子に乗るタイプの人です。

第2話　その後の日常

第2話　その後の日常

「ふむふむ。なるほどなるほど。身長は１７２ｃｍ　体重は５６ｋｇ　視力両目ともに１．５　運動神経まあまあ　好きな食べ物ハンバーグ、と！」

「あのーそのデータは意味あるんですか？特に好きな食べ物・・」

「あるよ、もちろん。その人のデータを元にＩＳを組み立てると使いやすさが全然違うからね。あと食べ物は聞いてみただけー。ハンバーグ、ぷッ」

なんでハンバーグで笑ったの？ハンバーグさんＤＩＳってんの？ちょっと表でｒすいません調子乗ってました。

束さん（って呼べって言われた）の研究の手伝いをすることで、生かしてもらえることになった俺は、さっそく身体検査をさせられていた。
てか初対面のときと全然雰囲気ちがくね・・・？ま、断然こっちのほうがいいんだけどさ。

「それでまぁ、これから伊波には実際にＩＳを操縦してもらうこと

になるんだけど、動かし方とかわからないよね？」

「はい。動かし方はもちろんＩＳ関連の知識はほとんどないっす。」

そりゃそうだ。アニメ見ただけなんだから。女しか乗れないってことぐらいしか覚えてない。俺男だけどさ。

こんなことになるなら小説も買っておくんだったなぁ・・・。

「そっか。じゃあこれから一週間この天才束さんがみっちりＩＳのなんたるかを叩き込んであげるから大船に乗ったつもりでいなさい！ぶいぶい！」

「・・・はい。」

こうして一週間、ＩＳについて猛勉強した。

正直教え方がうまかったので全然苦ではなかった。さすが天災。

＊

今俺は名前もしらない荒地に突っ立っていた。ここどこだよ・・・。

そもそも日本なのか？

「それじゃ今日からＩＳを動かしてもらうよ。いいデータが取れるようにがんばろう！」

目の前にＩＳが置いてある。”打鉄”だ。アニメみてて思ったけど、かなりかっこいいよなこいつ。
武器が刀ってのがさらにいい！

このまま眺めててもいいのだが、束さんの目線が痛いのでしょうがないから乗ってやる。
べ、別にアンタの目がこわいから乗るわけじゃないんだからね！！

「どう？一応伊波に合うようにちょちょっといじってみたんだけど。」

「すごくしっくりきます。いい感じです。」

ＩＳが体の一部みたいだ。まるで違和感がない。

「でしょでしょー？それじゃ適当に動いてみてー。」

言われたとおり好きに動いてみる。えーと歩行は・・・

———ガシャン、ガシャン

おおぉぉぉ！！やばいテンションあがる！なんだこれ、新感覚だ。チンさむはんぱねぇ！じゃあ次は飛んでみよう。イメージ、イメージ。

———ふわっ。

おおおおおぉぉぉぉぉ！！！俺飛んでる！超飛んでる！すげぇ！マジＩＳすげぇ！うえぇ酔って来たー！

おろろろろろろろろろろ。

休憩中・・・。

てゆうか空からまわり３６０。見渡してもなにもないな。ひたすら荒地だ。休憩後また空にあがり、空中散歩を楽しんでいた。酔い止め？そんなのねぇよ！

「おっけー。じゃあ一旦戻ってきてー。」

いきなり目の前の画面に束さんが映り、話しかけてきた。色々考えているうちに結構な距離飛んでいたらしい。
んじゃ戻るか。機体を旋回させて束さんの元に飛んでいく。

ようやく束さんをみつけ、高度をさげる。そしてふと思う。

「あれ・・・。そういや、どうやって減速するんだっけ？」

ブレーキはどこですか？

束さんが近づいてくる。いや、正確には俺が近づいているんだが・・・。

「（やば。まじでどうすればいいんだっけ！？このままじゃ束さん

にぶつかる！そ、そうだ。体をそらすイメージってもうおせぇ！！）
」
「うわあああああああああああああ！！」
「ん？えぇぇぇえええええええええええええ！？」
――――ドォオオン！！
爆音とともに俺顔から地面につっこんだ。何も見えない。埋まっている頭を引っ張り、周りを見渡す。束さんがいない。近くに見覚えのあるウサ耳を見つける。
ど・・・どうしてこんなところに・・・！
「た、束さん・・・。な、なんで・・・こんなことに・・・ｏｒｚ」
「・・・・・・。」
うしろからものすごい殺気がする。いや、気のせいだろう。こんなところに人がいるはずない。気のせいに決まってる。それより束さんが・・・ちくしょう！！
「くそっ！いったい、いったい誰が束さんを・・・許さない！絶対にゆｒ「てりゃあああ！！！」ぶふぉおおお！」
突然後頭部に重い衝撃がはしり、再び顔が地面に埋まる。暗い。首を引っこ抜き、とび蹴りをかましたであろう彼女に一言。
「・・・なにするんですか。」

「それはこっちの台詞だよ！なんで私につっこんできたの！？危うく死ぬところだったよ！しかも意味わからない茶番はじめるし！！」

止め方忘れてたんですもん。てか生きてたんですね。あと茶番とか言うな。

「勝手に殺さないでよ！・・・はぁ。次からは気ををつけてよね。ホントにもう・・・。」

さーせんした。以後気をつけます。

「じゃあ、今日はコレぐらいで。はいこれ。しっかりその顔消毒しときなよ？」

そういいながら俺に日本酒を渡し、どこかに帰っていった。これで消毒しろと・・・？って置いてかないで！？

第3話　束の実力（前書き）

一話の長さってどれくらいがいいのだろうか・・・。

第3話　束の実力

束さんの手伝いをはじめて半年がたった。今ではＩＳの操縦もそこそこ様になってきてると思う。
瞬間加速（イグニッションブースト）とか使えるようになったんだぜ？
まぁ主人公の一夏さんはＩＳ操縦し始めて１ヶ月たたないうちに使っていた気がするが・・・。
気にしちゃいけない。物語の主人公なんてそんなもんだ。
これが主人公とモブキャラの差ってやつさ。・・・くそがっ！

それは置いといて、最近束さんがあたらしい機体を完成させたらしい。
なんでも妹の箒ちゃんの誕生日にあげるんだー、とか。あーあったなそんなシーン。紅桜だっけ？

「伊波！紅椿の試運転したいから私と勝負して！」

桜じゃなくて椿だった。

第３話　束の実力

半年間打鉄に乗ってきた、戦闘は何度もしている。この前は白式の

機体調整で戦った。零落白夜はチートだと思った。
束さんだけじゃなく無人ＩＳとも戦った。正直強すぎて笑えなかった。まぁなんども挑戦して倒したんだけどな！自慢乙。

「それじゃあ、いっくよー！」

その言葉と同時に紅椿が突っ込んでくる。その両手には２本の刀が握られている。

――――――速い！

瞬間加速（イグニッションブースト）を使ってないのに、この加速。
それだけでこちらとの性能差がどれだけかけ離れているかがわかる。
交互に２本の刀で攻撃してくる。俺は相手の出方を伺うためしっかり防御、回避に徹っする。

「うがあああ、めんどーだなぁ！」

そんな俺にしびれを切らしたのか、紅椿は一旦距離をとり何かをしようとしている。
追うべきか、様子見するべきか、どうする・・・？そんなことを考えているうちにハイパーセンサーに反応。

【前方より敵攻撃が接近中！】

衝撃波！？
とっさに刀で防ぐが、衝撃に耐えきれず吹き飛んでしまう。そこへ2撃、3撃目と追い討ちがせまる。
なんとか体勢を立て直し、横に飛ぶことで回避する。
直後、相手に向き直り瞬間加速（イグニッションブースト）で接近。反撃開始！

「おらぁ！」

刀を振り下ろし、相手のバリアを削ることに成功する。その後距離をとり相手を伺う。一撃離脱を心がけよう。
奇襲だったためうまく決まったが、これからどうするか。攻撃をよけながら考える。さっきみたいな愚行はしない。

（アニメであんな攻撃使ってたっけ？いや、俺が覚えてないだけか？近接戦闘だけでなく中距離もカバー。加えてあの機動力。やっかいすぎるだろ・・。）

武器を変えた様子はないので、たぶんあの衝撃波は両手の刀からでているんだろう。

――それなら！

敵を中心にした円状に飛び回る。この距離なら回避した後反撃に移れる！

「えぇーい、おちろー！」

来た！紅椿が両手を振りあげる。その瞬間を見計らって、回り込むように瞬間加速（イグニッションブースト）。
振り下ろされた刀から衝撃波が繰り出されるが、追尾性能がないためすぐ横を通り過ぎる。

「これでっ、どうだ！」

そのまま紅椿の脇をすれ違い様に薙ぎ払う様にで一閃。剣道で言う”抜き胴”だ。

おっし！いい手ごたえ。すぐさま、紅椿のほうを振り向く。

「いい感じじゃない！伊波～」

・・・って全然効いてないじゃん・・・ｏｒｚ
いくらなんでもそりゃないわ。なにがいい手ごたえだよ・・・。
これじゃただのいたい奴じゃん、取り消したいわー。

【前方から敵攻撃多数接近中！】

紅椿からまたもや衝撃波が接近してくる。ただし、今度はさっきのソニックブーム的なものではなく、
大量の槍みたいなやつである。うん。回避無理！

【ＥＭＰＴＹ　ＮＯＴＳＨＩＥＬＤＥＤ】

「うんうん、いい感じかな！さっすが天才束さん！」

こうして今回も俺の黒星で幕を閉じた。

――――――翌日。

「そっかそっか。いっくんＩＳ学園にｎ――――――」

束さんが携帯をみながらなにかをつぶやいている。誰かからメールか電話でもきたんだろう。
そういえばこっちの世界に来たとき携帯と財布だけは制服のポケットに入ってた。

見たら財布は無事だったが携帯はぐちゃぐちゃ。トラックにひかれたんだから当たり前だろって思うかもしれないが、
じゃあなんで俺自身は無傷なのかって話になる。

てかよくよくかんがえたら二次創作のオリ主みたいだよな、俺。
あ～だから無傷なのか、納得！・・・できるわけねーだろ。

「あ、そうだ！」

なにか思いついたらしい。ウサ耳が一緒に動いてとてもチャーミン

グです束さん。

「伊波！君もＩＳ学園に入学しなよ！うん、それがいい！」

・・・Ｗｈａｔ？

第４話　きたぞ！ＩＳ学園　前編（前書き）

ここからしばらくアニメ沿いです。

第４話　きたぞ！ＩＳ学園　前編

・・・はい、とゆうことで５日前、天災束さんの「ＹＯＵ、ＩＳ学園に入っちゃいなよ」
とゆう突拍子のない発言により、ＩＳ学園への入学を余儀なくされた伊波です。

その前に学園に入るためにはまず俺がＩＳを使えることをお偉いさん方に知らせる必要があるわけだが、そこは束さん。すでに話を通してあるそうだ。

２人目の男性ＩＳ操縦者がでたと世間では大ニュースになったらしいが、
研究所から直接このＩＳ学園にきたため正直よく知らない。できれば、前の世界で住んでいた自宅周辺に行ってみたかったが、まぁ後で来ればいいだろう。

ちなみにあの物騒な腕輪ははずしてもらった。自由って素晴らしいな！

余談はさておき、俺は現在とある人を待っていた。場所はＩＳ学園の門前。束さんが言うには

「いけばわかるよ！その人はわたしのとーっても大切な幼馴染だから失礼のないようにねっ！」

だそうだ。そこまで言われれば誰のことだかすぐにわかった。
あの人だろ、第一回モンドグロッソ大会の覇者で主人公一夏の姉の、

「お前が束の言っていた、伊波涼太か？」

織斑千冬だろ。

第４話　きたぞ！ＩＳ学園　　前編

「お前は私の受け持つ１－１に転入するわけだが――」

廊下を進みながら前を歩く人物に目をやる。この人が主人公一夏の実の姉、織斑千冬か。

束さんも美人だったが、この人も相当だな。目、怖いけど・・

「伊波。聞いているのか」

いきなり後ろを振り向き、目が合う。先生睨まないでください。超怖いっス。

「も、もちろんです。それで俺家ないんですけど、寮の部屋ってもう用意されてるんですかね？」

――――研究所を旅立つとき、束さんは言った。

「今まで楽しかったよ。これからＩＳ学園でがんばってね！」

そんなことといわれたら帰りにくいよなぁ・・・。寮の部屋用意されてなかったらどうすっかな。

「あぁ、話は束から聞いている。あるにはあるんだが・・・まぁその話は放課後にする」

あるにはあるんだが何!?すげー気になるんですけど!・・・まぁ寝れればどこでもいいか。野宿とかまじ勘弁。

「ここがお前の教室だ。私が入れと言うまでここにいろ。いいな?」

話しているうちに教室に着いたみたいだ。なんか緊張してきた。まさかこっちに来てまた学校に通うことになるなんて思ってもみなかった。中学思い出すな〜、俺彼女できたんだったな・・・一瞬。orz

「伊波、入れ」

織斑先生が呼んでいるので教室に入る。うっし!

ガラガラ。

「今日から諸君らのクラスメイトになる伊波だ。仲良くしてやってくれ」

教室が沸き立つ。

「えーと、今日からこのクラスでお世話になります、伊波涼太です。これからよろしくお願いします」

――――――きゃあああああああああああああ！！！

「織斑君に続いて2人目の男の子よ！」

「私好みかも！！」

「顔は普通ね。でも男！」

おい最後のヤツ、でも男ってなんだ。男なら誰でもいいのかお前は。

「えっとよろしくね。伊波君。私はこのクラスの副担任、山田真耶です。伊波君の席は織斑くんの隣になります」

と言われその席に座る。横に今にも飛びついてきそうなやつがいる。織斑一夏だ。

「な、なに？」

「俺、織斑一夏、一夏って呼んでくれ！お前のことはなんて呼べばいい！？」

すごい目がキラキラしている。女しかいない空間に一人放り込まれたんだ。相当つらかったんだろうな。

でもあえて俺はこの言葉をおくろう。リア充爆発しろ！

「涼太でいいぞ。よろしくな！」

「おう！でも涼太が入ってきてくれてホント助かったよ！学園に男一人はつらかったんだ・・・」

遠くを見ながら言う一夏を見てちょっとだけ同情しそうになった。

「それじゃあ、授業を始めます。参考書の１３ページを――――」

こうして俺の学園生活が始まった。

――――――――――休み時間。

「ぐわあああぁぁ。もう全然わかんねぇ」

机にひれ伏しながら一夏が奇声をあげる。大方、授業についていけなくて嘆いてるんだろう。

「涼太はさっきの授業理解できたのか？」

当たり前だろ。こんなの初歩の初歩じゃんか。

「なんで後から来たのに俺よりわかってるんだよぉぉぉ」

束さんからＩＳについて教えてもらってなかったら俺もこんな風になってたんだろうな。心の中で感謝しておく。

「あ、あの伊波君」

「ん？」

誰かに呼ばれ、後ろを振り向くとクラスメイトの女の子がそこに立っていた。

「授業ちゃんとついていけてる？もし無理そうだったら私が教えてあげようか・・・？」

なんていい娘なんだろうか！この世界に来て初めて普通の女の子に会った気がする。

顔じゃなくて性格のことね。照れながら聞いてくる様子はとてもかわいらしい。頭なでたくなる。

「今のところはだいじょぶかな。でもありがとう。わからない所があったら頼らせてもらうよ！」

あんまり女の子と喋るのは慣れていないが、（天災をのぞく）こんな感じで大丈夫だろうか。

「う、うん！」

なんか喜んでるし大丈夫そうだ。よかったー。

「ちょ、ちょっと抜け駆けなんてずるいわよ！」

「あぁー私も！！」

ぞろぞろと女の子たちが集まってくる。てかこの人数他のクラスからもきてるだろ。
でも前の世界ではもてなかったから、正直かなりうれしい。うへへ。
ん？爆発しろ？黙れ負け犬ども。

「おい、バカども。鐘がなったのが聞こえなかったのか。さっさと戻れ」

「「「「「「「「は、はい！」」」」」」」」

「さすが千冬姉」

おいバカ。先生に聞こえるぞ。

――――パァン！！

「学校では織斑先生だ。何度も言わせるな」

ほら・・・。

第４話　きたぞ！ＩＳ学園　後編（前書き）

オリＩＳ登場です。

第４話　きたぞ！ＩＳ学園　後編

―――昼休み

「一夏ー。お昼ごはん食べに行きましょー！」

廊下からツインテールの女の子が一夏を呼んでいる。凰　鈴音。中国の代表候補生で、一夏のセカンド幼馴染だ。

「ちょっと、お待ちください鈴さん！抜け駆けは許しませんわよ！」

「一夏。昼食を食べに行こう」

上からセシリア・オルコット、篠ノ之箒。セシリアはイギリスの代表候補生。箒は一夏のファースト幼馴染であり、束さんの妹だ。全然似てないよな、この姉妹。

「あぁ。涼太！お前も一緒に飯食おうぜ！」

一夏が俺を誘ってくる。正直混ざりにくい。

「い、いいのか？」

「おう！もちろんだ。な！皆」

「別にいいけど・・・」

「わたくしはかまいませんわ」

「私もいいぞ」

「ほらな！いこうぜ！」

そういって俺の手を引っ張る。

「「「ちょっ！」」」

・・・・。

一夏。お前がいいやつなのはよくわかった。だからそろそろ手を離してほしい。

後ろの三人が殺気放ってるから！

第４話　後編

食堂に着いた。

皆それぞれ注文したものを手に、空いていた席に座った。

「自己紹介がまだでしたわね。わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。もし授業でわからないことがあったら聞いてくださってかまわなくてよ。

なんたってわたくしはエリー「私は凰鈴音。２組のクラス代表で中

国の代表候補生よ。よろしくね」ちょ、ちょっと！」

「篠ノ之箒だ。よろしくな伊波」

「あぁ！それじゃ俺も。伊波涼太だ。皆これからよろしくな！」

なんてゆうか、ホントにぎやかだな。

「それで、涼太もやっぱり専用機もってるの？」

初対面でその呼び方なんスね凰さん。別にいいけどさ。

「いや、持ってないけど。なんで？」

「べっつにー？一夏が専用機持ちだから同じ男のアンタも持ってるのかなぁって思っただけよ」

そういやそんな話聞いたことないな。男でＩＳ乗れるからって専用機もらえるわけじゃないんだな。

「なんで俺だけ専用機なんだろうな。俺が言うのもなんだけど不公平だよな」

それはお前が”一人目”だからだろ。ｊｋ。

「まぁ俺打鉄好きだからいいんだけどな」

これは本当だ。実際アニメみてても打鉄がどのＩＳよりも一番かっこいいと思ったくらいだし。

「変わってますのね」

そうか？

そんな感じで昼食をとった。昔の中学校生活を思い出して楽しかった。それから午後の授業はほとんど覚えてない。とゆうか聞いてない。知ってる内容だしな。

――――――放課後

「なぁ涼太。俺今から箒達と一緒にＩＳの特訓するんだけど、お前もどうだ？」

一夏が俺に尋ねる。行きたいとこだけど・・・。

「悪い。今から織斑先生に寮の部屋に案内してもらうんだ。部屋の整理やら色々ありそうだからむりっぽい」

「・・・そうか。それじゃあしょうがないな」

「また今度誘ってくれ」

「あぁ、またな」

一夏と別れ、教室を出る。まずは職員室を探さな「伊波」・・・くて済んだ。

「織斑先生。待っててくれたんですか？」

「あぁ、お前まだこの学園についてあまり知らないだろ。迷子になられても困る」

なるほど。この時折みせるやさしさに女子達はやられたのか。少しわかった気がする。

「何ボサっとしている。置いていくぞ、さっさとしろ」

先生、その飴と鞭くせになりそうです。

＊

寮についた。部活や一夏達みたいな自主練をしてない生徒はもうこの時間帯に寮にいるようで廊下で談笑している。

「見て。織斑先生よ」

「お姉さまぁあ！」

「あ、後ろにいるの例の転校生じゃない？」

「ホントだ！声かけてみようかな」

「行っちゃいなよ～」

なんだか客寄せパンダの気分だ。落ち着かない・・・。織斑先生は全然気にしていないようだが。

「君達。通してくれ」

「「すいません。先生！」」

むしろどうどうとしている。もう姉御と呼ばせてください。

「ココなんだが・・・」

そして部屋に到着。

「なにか問題でもあるんですか？」

たとえばでるとか？なにが？アレが。・・・。

「夜にな、出るらしいんだ。幽霊が」

「うわあああああああああああああああ」

「冗談だ」

「・・・・」

「実はな。この部屋は元々荷物置き場として使われていたんだが今はほとんど使われていない。つまり中は埃だらけだ」

なんで冗談挟んだんだよ。真顔で言うなよわかりにくいわ。は？こわがってねーし。は？ふざけんなよこわくねぇっつってんだろ。

「つまり使うなら掃除をしろってことですか」

「まぁそうゆうことだ」

「なんだ。そんなことですか・・・。それくらい全然おっけーdってうわ！汚っ！なんで弁当の容器が置いてあるんだよ・・・え・・この本なんぞ「それじゃ、がんばれよ」先生！待ってぇえええ！」

くそっ見捨てられた・・・。まじかよ、こんなんじゃ寝られねーよ。はぁ、片付けるか。

＊

「やっと片付いたぁぁあああああ！！！」

生まれ変わった部屋に満足しながら、ベットにダイブする。あ、やべ。眠くなってきた・・・

―――コンコン

ドアをノックする音。誰だよ、眠いのに。

「伊波、いるか？織斑だ」

姉御か。「開いてますよ。どうぞー」

「ほぅ、きれいになったじゃないか」

「そりゃ2時間もかけて念入りに掃除しましたからね。もうこの部屋は俺のものです！出て行けって言ったって動きませんから！」

「それはかまわないが、そんなことより伊波お前に専用機が届いた」

ん？せん・・・なんだって？

「専用機？初耳なんですが」

「うん？束に聞いていないのか？」

「なにを・・・？」

「はぁ・・・まったく。アイツが直々にお前の専用機を作った。半年間の手伝いのお礼、だそうだ」

ま、まじすか・・・！

「機体は第3アリーナに待機させてある。今からいくぞ」

了解です。それにしてもあの束さんが・・・。

＊

第3アリーナに到着。

「ん？ちふ・・織斑先生、それに涼太も。いったいどうしたんだ？」

一夏の一言に箒、セシリア、鈴が集まってきた。

「一夏？あ、先生どうしたんですか」

「涼太さん、どうしてこちらに？」

もう名前に関しては突っ込まない。好きに呼べよ・・。そのかわり俺も好きに呼ばせてもらうからな。

「いやね、俺の専用機が届いたらしいんだ」

「あれ？アンタ昼に自分は専用機持ちじゃないって行ってなかったっけ？」

いや・・・そうなんだけどさ。さっき知ったんだからしょうがないだろ？

「おい、行くぞ。さっさと終らせて私は休みたいんだ」

えぇぇ。生徒の前でそれ言うか・・・

＊

「これがお前の専用機”黒鉄”（クロガネ）だ。」

黒鉄・・・。打鉄真っ黒にしてみました的な？

「見た目通り打鉄弐式と並ぶ打鉄の後継機だ。機動力、旋回性能、耐久性すべてにおいて底上げされている」

おぉ、てか見た目超かっこいいんですけど！マジ束さんわかってるぅ！

「刀を抜いてみろ」

言われたとおり抜刀。

「・・・刀身が黒い」

ここも黒。全部黒。よし。このＩＳをクロスケと命名しよう。

「打鉄の刀に比べ、軽量化され振りやすくなっている。耐久度は変わらないそうだから安心しろ」

軽なこれ。すぐ折れそうだけどホントに大丈夫なのか・・？

「では、話は以上だ。明日は実習がある。しっかり休めよ」
「了解です。失礼します」
黒鉄を待機状態（ブレスレット）にし、その場をあとにする。

＊

「涼太ー」
一夏？それに皆も。
「まだやってたのか？いい加減やめたほうがいいんじゃない？時間的に」
「ちがうわよ。アンタを待ってたんじゃない」
俺を？
「涼太さんの専用機を見せてもらおうと思いまして」
あーなるほど。
「いいよ。こいクロスケ」

直後俺の体が真っ黒い機体に包まれる。

「黒っ！！」

いいリアクションだ鈴！

「打鉄・・・なのか？」

「いや、打鉄の後継機にあたる機体らしい。君のお姉さんがつくったんだと」

「姉さん・・・」

なんか考え込んでしまった。長くなりそうだなぁおい。

「な、なぁ！はらへらね？食堂いこうぜー」

早く帰りたいんだよ。疲れてんだよ。

「そうだな。俺も実ははら減ってたんだ」

ナイス一夏。もうさっさと飯食って寝よう。

「おーい、行くぞー箒」

「ん？お、おい！私を置いていくな！」

それにしても束さんが俺にプレゼントとは・・・。なにかの前触れ

じゃなきゃいいけど。

第４話　きたぞ！ＩＳ学園　後編（後書き）

書いてる途中に気づいた打鉄弐式の存在。でもいまさら後には引けないよ・・・。

第5話　転校生と模擬戦と（前書き）

一話一話みじかいんじゃね？って思ったので今回は長めです。

なので読みにくいかもしれません。

まぁものは試しとゆうことで・・・。

第5話　転校生と模擬戦と

その日の朝はなんだかいつもより騒々しかった。

――――ねぇ、聞いた？あの噂。

――――え？なになに？

なんかあったんだろうか。この時期になにかあったっけ・・・。転校生のことか？

「なぁ、なんかあったのか？」

端の席にあつまっていた箒とセシリアに問いかける。

「さぁ、私は何もしらないぞ」

「私もですわ」

二人も知らない？てかこの二人なにげにクラスから浮いてるな・・・。話混ざってくればいいのに。

俺も言えないけどさ。

「おはよう。なに盛り上がってんだ？」

そんなこと考えていたら一夏がやって来た。

「涼太。何の騒ぎだよ？」

俺が知るか。

「席につけ。ＨＲをはじめるぞ」

なんかめんどくさそうな予感しかしない・・・。

第五話　転校生と模擬戦と

「今日も転校生を紹介します」

その言葉にクラスが沸き立つ。あぁそうか、俺と一日違いだったんだな。

教室のドアが開き、金髪の美少年が入ってくる。正直正体を知ってる俺からすれば美少女にしか見えないが。

「シャルル・デュノアです。フランスからきました。皆さん、よろしくお願いします」

―――きゃあああああああああああああ！！！

発狂している女子達を横目にこれからのことについて少し考えてみる。

俺の知っている内容通りにいけば明日一夏に正体がばれてシャルルの暗い過去について語られるはずだ。そのとき俺はどうするかだけ

ど・・・。その場に同席するか、それとも女だと知らない振りをしているか。うーん・・・悩む。

「それから織斑、伊波」

考え事をしていたら織斑先生に呼ばれた。

「デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ。それでは解散」

面倒を見てやれ、か・・・まぁそのときになったら考えよう。関わっても関わらなくてもストーリーの本筋はかわんないだろうしな。

＊

女子達が教室で着替えを始めたので俺と一夏はシャルルを連れてアリーナの更衣室に来ていた。

廊下で女の集団に襲われかけたがなんとか逃げ切った。

あと一夏、お前誰とでも手繋ぐのやめたほうがいいと思うぞ？そっち系のヤツだとおもわれてもしらねーぞ俺は。

「ごめんね。いきなり迷惑かけちゃって」

「気にすんなよ。同じ男同士だろ？」

「だなー」

「ありがとう。二人とも」

「これからよろしくな。俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ」

「伊波涼太。俺も涼太でいいよ。よろしくなー」

「うんよろしく一夏、涼太。僕のこともシャルルでいいよ」

自己紹介も済んだしさっさと着替えないと。そろそろ時間がやばい。もう織斑先生の愛の鞭（体罰）は嫌だからな。そう思い上着を脱ぐ。ソレを見て一夏も着替え始める。

「うわっ！！」

いきなり後ろから奇声が聞こえた。振り向くと両手で顔を覆っているシャルルがいた。

あー・・・そっか、恥ずかしいのね。

「早く着替えないと遅れるぞ。ウチの担任はそりゃ時間にうるさい人で・・・」

「う、うん。着替えるよ？でもその・・・あっち向いてて。ね？」

あんまじろじろ見ててもかわいそうなので後ろを向きスーツに袖を通す。これ肌に張り付いて落ちつかないんだよなぁ。

「って着替えるのはえーのな。なんかコツでもあるのか？シャルル」

「え、べ、べつにないけど」

「てゆうかそれ着やすそうだな」

「うんこれはデュノア社製なんだよ。――」

お前ら全然急ぐ気ないだろ・・・。

＊

「本日から実習を開始する」

今日は専用機持ちが各グループのリーダーとなってＩＳの基本操縦を練習するらしい。

で、その前に戦闘の実演があるらしく、これから呼ばれる生徒は山田先生と模擬戦だそうだ。

たしかセシリアと鈴だったよな？速攻でやられてた気がする。

「伊波涼太。前に出ろ。」

・・・・・・はい？

「おい、いないのか伊波！」

「い、います！」

な、なんで俺！？しかも一人かよ！？

「一度で返事をしろ、ばか者。そしてさっさと準備をしろ。」

「せ、先生！俺一人だけなんですか！タイマンなんですか！？」

ありえないだろっ！？２対１でも負けてたのに・・・！

「たしかに山田先生相手では今のお前らには荷が重いだろう、だが。」

そこまで言った後、俺にしか聞こえないよう耳元でこうつぶやいた。

「半年間アイツの元で助手をしていたんだろう？お前の実力がどれくらいのものなのか見せてみろ。」

無茶苦茶すぎるぞこの先公・・・。だいたい助手じゃねーし、ただのモルモットだし。

「よし。それでは始めるぞ。」

「がんばって涼太！」「涼太、負けるなよ！」

無茶言うなよ一夏・・・。くそっ！もうどうにでもなれ！

＊

ｓｉｄｅ　山田真耶

相手は昨日転入してきたばかりの男子生徒。専用機だって届いたばかりらしい。
それなのにどうして織斑先生はわざわざ伊波君を指名したんだろう。
彼にはなにかあるってことなのかな？

「こい。くろすけ！」

その声にあわせ、彼の体を覆うように姿を現す打鉄のもうひとつの後継機”黒鉄”。
武装はそのままに全体のスペック上昇に力を入れて作ったＩＳだそうだ。
織斑先生が彼に何を期待しているかは知らないけれど、武器がブレードだけなら遠距離戦闘を主体とする私とは正直いって相性が悪い。
ある程度距離をとっていれば完封できるはず。大丈夫、負ける要素はどこにもない！

このとき真耶は完全に油断しきっていた。
相手は専用機を持っているがそれは男とゆう特異体であるから。操縦者としての腕はまだまだだろう、と判断しこの後激しく後悔することになるとは夢にも思っていなかった。

「それでは、はじめ！！」

織斑先生の合図とともに右手のスナイパーライフルを標的に向ける。
伊波君には悪いけどこの勝負一方的に勝たせてもらおう。
そう思いスナイパーのレンズに顔を覗き込んだ瞬間、私は目の前の光景に驚愕する。
なぜなら彼がすでに私のすぐそばにいたからだ。
「瞬間加速（イグニッションブースト）！？」
気づいたときにはもう遅い。伊波君はブレード（ブレードの間合い）を思い切り振りかぶり、
――――私『ラファール・リヴァイブ』を地面に叩き落とした。

side　涼太

奇襲はうまくいった。だけどそこで終わりじゃない。なんせこっちはブレード一本で戦ってるんだ。
相手に距離をとられたらその分不利になり勝利は遠のく。紅椿戦のときみたいに一旦落ち着こうなんて思っていたら間違いなく負ける。
だからこそここで一気に畳み掛ける！
最高速度を保ったままラファール・リヴァイブ目掛けて突きをくりだす。立ち上がる隙なんて与えない。
そこ、卑怯とかいわない。・・・だがその追撃は地面を転がることにより回避され、直後俺の右肩に衝撃がはしる。

「（くっ！アサルトライフルか！）」

その弾丸によってシールドが3割程削らされてしまう。しかし相手はまだその場から離脱できる状態ではない。だったら今のうちに片をつける！

懐に踏み込み、連撃の応酬。だがラファール・リヴァイブを守る実体盾がうざいことこの上ない。

こちらの攻撃がすべてガードされてしまう上に攻撃モーションの合間にライフルを打ち込んでくる。さすが山田先生と言ったところか。シールド残量がどんどん削られていく。でも攻撃を緩めると離脱されてしまうのでソレもできない。

「くっそ！！」

俺はこのジリ貧状態に完全にはまっていた。

ｓｉｄｅ　一夏

「すげぇ・・・」

山田先生と涼太の戦闘を見て圧倒される。昨日会ったばかりで涼太のことはほとんどしらないが、

少なくともＩＳにはほとんど乗ったことがないだろうと思っていた。なぜなら同じ男の俺がそうだったから。

しかし目の前の光景がそれは否だと訴えてくる。あきらかに初心者

の動きじゃない。

「うん。涼太のあの機動力、それを抑える山田先生の技量。どっちもかなりの実力者だ」

シャルルが2人についての感想を述べる。他の皆の顔をみてみるとやはりあの2人に驚いているようだ。
だが一人だけ驚いていない人物がいる。千冬姉だ。

「なるほど。半年間ただなんとなくＩＳに乗っていたわけじゃないようだな」

うん？なにかつぶやいているが、声が小さくて聞こえなかった。半年がどうとか・・。
まぁそんなことより、と目の前の戦闘に視線を戻す。

「（いつか俺もあんなふうに・・・）」

涼太に負けないくらい強くなってやる！

ｓｉｄｅ　真耶

正直、最初の奇襲からの追撃には驚いた。しかしそれは油断していた自分が悪い。
接近戦のみで戦う伊波君に間合いをつめる術がないなんてことはありえない。少し考えればわかることなのに・・・。

教師として自分が恥ずかしい。まだまだ未熟だ。だが後悔は後にしよう。
今は目の前で猛攻を繰り出している彼を倒すことに集中しよう。
現在私のシールド残量は6割。たぶん伊波君の方はあと2，3割程度だろう。

このまま押し通せばなんとか勝てる！

そう思っていた矢先、状況が一変した。

涼太が実体盾もろともラファール・リヴァイブにタックルをしかけてきたのだ。

かなりの衝撃に襲われる。おそらく瞬間加速（イグニッションブースト）で勢いをつけたのだろう。
当然私の体勢は崩れ、一瞬よろけてしまう。その隙を相手が見逃すはずがなかった。
地面を削りながら怒涛の切り上げ。
その攻撃により盾が弾き飛ばされる。

「ま、まだまだ！！」

ようやく動けるようになった私は即座にライフルを構え至近距離で打ち出す。ソレと同時に左肩に振り下ろされる黒い大太刀。

【シールド残量低下。残り3割】

「（このままラッシュに持ち込まれたら負けるっ！）」

そう思った直後にＩＳからアナウンスが流れた。

【敵ＩＳの撃墜を確認】

え・・・・？か、勝ったの？

ｓｉｄｅ　涼太

くっそー！まけたー。

悔しがっている俺に織斑先生が話しかける。

「２人ともいい戦いだった。他の生徒たちにとっていい刺激になっただろう」

それはよかったっすね。はぁ・・・俺まけてばっかりだなぁ・・・。

「伊波君！素晴らしい機動力と状況判断でした！最後の反撃はかなり冷や汗ものでしたよー・・・」

山田先生１年生相手に本気にならないでくださいよ、強すぎです。

それと今の戦闘で疲れたんでもう休んでていいですか？

「ダメに決まっているだろう。これからお前にもグループのリーダーになってもらうんだからな」

お、鬼！ここに鬼がいるぞぉぉ『パァァン！！！！！』うごぉぉ！！

「うるさい、黙れ。それでは次にグループになって実習を行う。リ

ーダーは専用機持ちがやること。では分かれろ。」

なんで実習の時間に出席簿持ちだしてんだよ・・・。それ叩くためのものじゃないぞ！

ったく、これだから新人教ｓいやすいませんでしたなんでもないです。

ま、まぁどうせ？実習だって一夏とシャルルのとこに集中するだろうし？

だいじょうぶだｒ「「「「「「伊波くぅぅぅぅぅぅぅぅん！！！」」」」

！！？！？！？　ちょ、ちょ！な、なに！！？

「伊波君さっきの戦いすごかったよー！私もあんなふうに操縦できるようになる？」

「伊波君私におしえてー！」

「私伊波君に教えてほしいな！」

「いなみん～。おつかれさま～」

・・・ま・・・じ・・・・か・・・・ｏｒｚ　普段だったら超うれしい展開なのに今に限っては最悪だ・・・。

それと最後の人、いなみんって・・・・。いいネーミングセンスしてるじゃねぇか・・・！

「うん。皆よろしく・・・・」

気合いで乗り切ろう・・・。

なんとか気合いで実習を乗り切った俺は只今屋上で皆と一緒に昼食を食べていた。

「えーっと僕も同席してよかったのかな？」

シャルルが遠慮しがちに聞いてきた。

「一々気にしすぎだって。誘ったのは俺達なんだからいいに決まってんじゃん」

「そうだぜ、男子同士なかよくしようぜ」

ホントシャルルは気にしすぎだよな。まぁ家庭環境のせいでこうなったのかもしれないけどさ。

「それにしてもいいよな2人とも」

いきなり一夏が俺とシャルルを見ながらつぶやく。いいってなにがだよ？

「今日から同室だろ？俺一人だからうらやましいぜ」

・・・なるほどそうかそうか。・・・・・困ったことになったな。女子と同室なんて落ちつかねーよ・・・。

「あ、うん今日からよろしくね？涼太」

「俺今初めて知ったぞ・・・」

「はぁ！？シャルルが自己紹介した後千冬姉がいってたろ！」

言ってたか・・・？あ、そういや考え事してて聞いてなかったかも。

「もしかして涼太・・・嫌だった？」

嫌じゃないから！その捨てられた子犬みたいな目やめてくれっ！

「全然いやじゃねーよ！？むしろ一人は飽きたとこだったよ！」

「飽きたって、アンタ昨日転校してきたばっかじゃない」

うるせぇよ空気よめよ。酢豚って呼ぶぞコラ。

「そっか、よかったぁ・・・」

なんでシャルロットが人気あったのかわかった気がするよ・・・。

「ん、んん！一夏さん？私今朝たまたま、早く目が覚めましてこんなものを用意してみましたの」

いきなり話に乱入してきたセシリアが持っていたバスケットの中身を見せる。・・・うまそうだな。見た目は。

「どうぞ、食べてみてください」

「なぁセシリア。俺も食っていい？」

さっきの模擬戦のせいですごい腹減ってるんだ。見た目大丈夫そうだし、いけるっしょ。

「えぇ、たくさんございますからどうぞ」

「ありがとう「いただきます」」

もらった卵サンドを口に入れる。その瞬間

ｊぅぃあおｐぢおｂｖぱふぢすｈｆ！？Ｄ＋！？！？！？

「いかがですか？お二人とも。どんどんいただいてもらってかまいませんのよ」

一夏の顔が青い。たぶん俺もあんな感じなんだろうな・・・うぷっ・・・。

「あ、いや・・・あとでもらうよ」

「うん、おいしかった・・・ありがとセシリア・・」

すごいなこれ。横にいるさわやか貴公子にも幸せをわけてやろう。

「シャルル。お前もひとつもらえよ。セシリア、いいよな？」

よしこれで。っておい一夏やめろ、シャルルにいらんこと吹き込むな。

「もちろんよろしくてよ」

「じゃあひとついただくよ」

ハムサンドらしきものを手に取り、口に運ぶ。

・・・・あれ？大丈夫そうｄいや、汗の量が半端ないやｗ

「おいしいよセシリア・・・」

必死に笑顔を崩すまいとする貴公子の姿にあっぱれをあげたい。うん、幸せは皆で分かち合うもんだよな。

そのあと箒と一夏のあーんイベントがあったり、それをセシリアと鈴がうらやましがったり、

いつも通りにぎやかな昼食だった。

夜――――――

「今日は大変だったね」

緑茶を飲んでいた俺にシャルルが話しかける。

「ん？あぁサンドイッチのことか？いや、あれもいい勉強になったと思えば・・」

「ちがうよ、模擬戦のこと。サンドイッチのことは誰かさんのせい

で僕もトラウマだよ」

シャルルがジト目でこちらを見てくる。何を言っているのかさっぱりわからない。

「あーうん。山田先生強かったなぁ。さすが元代表候補生」

「そうだね。でも涼太もすごかったよ？ブレード一本で山田先生をあそこまで追い込んだんだから」

正面からそういわれると正直照れる。・・・しばしの沈黙。あー緑茶じゃなくてコーヒーにすればよかった。

「ねぇ、涼太も一夏達と一緒に放課後ＩＳの特訓してるの？」

「いや？てゆうか俺も昨日転校してきたばっかでさ。誘われたけど荷物の整理とかでいけなかったんだ。シャルルも混ざりたいのか？」

部屋があそこまで汚くなかったら少しは参加できたんだろうな。なんで壊れたピアノなんておちていたんだか。

運び出すのに３０分かかったぞ。

「うん。僕も専用機持ちだからすこしは役に立てるかなって思ってね」

ホントはデータをとろうとか考えているんだろうか。まぁばれるんだから関係ないか・・・。

ってあれ？この状況だと誰にばれるの？

「涼太？どうしたの？おーい」

・・・・・俺じゃん。

「涼太ー。涼太！」

「あ、わりわり。明日一夏に聞いてみれば？大丈夫って言うとおもうよ」

「うん。そうするね」

どうしようこれから・・・。

第6話　暗い過去（前書き）

今回は主人公がやたらかっこいいお話です。

第6話　暗い過去

「伊波、ちょっと来い」

朝のＨＲが終わり一限目の授業の準備をしていた俺は、いきなり織斑先生に廊下に呼び出された。
なんかやらかしたっけ？と心配になるが、最近の行動に思い当たる節がない。なんで呼び出されたんだ？

「お前を呼び出したのは他でもない、ボーデヴィッヒのことだ」

ラウラ・ボーデヴィッヒ。ドイツの代表候補生で一夏ヒロインズの中の一人。ついさっきＨＲで転校生として紹介されていたが、俺と何の関係が・・・？

「先生、俺とそのボーデヴィッヒさんとなんの関係があるんですか」

「お前もさっき見ていただろう。あいつが織斑を殴るところを」

見ていたとゆうか、目の前で勝手に繰り広げられていたとゆうか・・・。

「ボーデヴィッヒは私がドイツ軍の教官をしていた頃の教え子だ。だからアイツがどんな奴なのかはある程度わかっていると自負している」

・・・・結局なにが言いたいんだこの人。

「理由は知らんがアイツは織斑を憎んでいる。そこでお前に頼みがある」

こちらを真剣な表情で睨んで・・じゃない見ている。織斑先生から俺に頼み事なんていったい何事だ!?

戦慄する俺を尻目に彼女はためらいがちにこう続けた。

「ボーデヴィッヒを、見張っていてほしい」

・・・・・・・・・は?

「はい?」

「だからボーデヴィッヒを見張っていてほしいと言っているんだ」

い、意味がわからない・・・。何で今の話の流れでその頼み事になる?前置き長かったくせに全然理解できないんですけど。

「先生、それ冗談かなんかですか?すごくつまらないです」

そうゆうのいいからさっさと用件を話してほしい。

「喧嘩を売っているのかお前は。私は本気だ。それと私は冗談が大嫌いだ」

どの口が言うかどの口が!アンタちょっと二日前の自分殴って来い。

・・・しかしまぁ頼みごとは本気らしいが。

「ボーデヴィッヒは軍人としては優秀だが中身は世間知らずの子供だ。もしかしたら感情に身を任せてなにかやらかすかもしれん。だ

からこうしてお前に頼んでるんだ」

なるほど、そうゆうことか。

「つまり先生は一夏が心配でたまらないからボーデヴィッヒさんを監視しとけと、そう言ってるんですね。あぁすばらしい姉弟愛ｄ『パァァァァン！！』ぐほっ！！」

いきなり出席簿で後頭部を叩かれた。何で殴られた？あとそれどこからだしたし。

「下らんことを言うなばか者。教師が生徒を気にかけるのは当然のことだろうが」

「ツンデレ乙」

『パァァァァン！！！！！』

やめてください、脳細胞が死滅してしまいます。

「それでどうなんだ？引き受けてくれるのか？」

右手の出席簿をいつでも振り下ろせる状態にセットしたまま再度頼まれる。どうやら俺に拒否権はないようだ・・・ｏｒｚ

「・・・喜んで引き受けさせていただきます先生」

拝啓、束さん。貴方の幼馴染様は今日も絶好調のようです。

第６話　暗い過去

放課後――――――――――――――――

「（うーん、見張ってろ、ねぇ）」

今日も授業を何事もなく終らせた俺は、今朝織斑先生に頼まれた・・・
いや脅迫された内容を思い出していた。
ラウラを観察しながらどうしようか考える。そんな俺に一夏とシャルルが話しかけてきた。

「涼太！今日もＩＳの特訓するんだけど、お前もこないか？シャルルもくるぞ！」

「うん。涼太も一緒に練習しない？」

残念だが今回も用事があるため特訓に付き合うことができない。

「あーわり、今からちょっと用事があるんだ。また今度な！」

残念そうな２人を横目にラウラが教室から出たところを確認する。
よし、行くか。

「それじゃな二人とも！」

二人に別れをつげ、俺はラウラの後を追った。

誰に話しかけるでもなく、足早にどこかに向かっているラウラ。俺は自分の中の記憶を引っ張り出しこの後のラウラの行動を思い出す。

「（たしかこの後一夏にケンカふっかけるんだったよな）」

なら最初からアリーナいけばよかったんじゃね？と今更後悔する俺。そうすれば一夏の特訓にも少しは付き合えただろうに。

まぁその話は一旦置いとこう。意識を前を歩くラウラに戻す。

「（なんで校舎裏の方に向かってるんだ？アリーナに行くんじゃないのか？）」

織斑先生と約束した手前放置するわけにもいかずそのまま追うことにする。ラウラが曲がり角を右に曲がる。それに従い俺も後を追うが、

「あれ？居ない・・・」

彼女はどこにもいなかった。この先は長い一本道で見失うはずがない。いったいどこに・・・。そんなことを考えていると突然背後から誰かに話しかけられた。

「貴様なんのつもりだ、なぜ私をつけまわす」

まさかと思い、振り返る。すると案の定、いかにも不機嫌そうな顔のラウラ・ボーデヴィッヒが立っていた。

「（ばれてた！？ってこの状況はまずいぞ！）」

言い訳しようにもこんなところにくる理由なんて見当たらない。もしかして誘い込まれた？

「おい、私の質問に答えろっ！！」

ドスの効いた声で俺を怒鳴りつけながら近づいてくる。そういえばこんなこと前にもあったな。思い出すのは束さんと初めてあったあのとき。この子は銃を持っていないがあの時と同じくらい命の危険を感じるのはたぶん相手が軍人だからだろう。

しかしまぁさすがに2度目だ。こんなことには慣れたくなかったが、驚くぐらい頭は冴えている。覚醒した俺は冷静にこの場を乗り切るためにある行動をとった。

「あ、あぁ！織斑先生じゃないですか！！こんなところでなにやってるんですか！？」

「なに？教官？」

ラウラの後方を指差しながら大声で叫ぶ。それにつられて後ろを振り向くラウラ。ま、まさかひっかかるとは。その隙に俺は全力で逃げ出した。

「ん・・・？どこに教官が・・・って貴様！だましたな！」

ものすごく古典的な作戦であった。それにひっかかったラウラに乾杯。だがすぐ気づいたラウラは一瞬遅れ、俺を追いかけてくる。足の速さでは俺もまけていないようだ。

「待て！！」

後ろでなにやら叫んでいるが無視して撒くことだけに集中する。昔の偉い人は言った。待てといわれて待つバカはいない。

「このっ！待てといっているだろうがっ！！」

その怒鳴り声と共になにかが俺の頬を掠り、目の前の建物に突き刺さった。

「ナ、ナイフ！？」

彼女はまだ子供で何をしでかすかわからない、織斑先生の言っていた通りだった。

その後俺は後ろから飛んでくる凶器に戦々恐々しながらもなんとか寮内に逃げ込むことに成功する。どうやらもう追ってきていないようだ。

「た、たすかった・・・」

寮の廊下を歩きながら小さくつぶやく。それと同時に今後毎日教室で顔を合わせないといけないことを思い出し、大きくため息を吐いた。

「（つかれた・・・。少し休もう）」

心身共に疲れた俺は自室のベッドに向かうのであった。

忘れていたわけじゃない！まだ帰ってきてないだろうと思ってただけだ！・・・誰に言い訳してるんだよ俺は。
目の前の光景に動揺しすぎて少しおかしくなっているようだ。そうなるのも無理はないはず。だって

「りょ、涼太・・・」

目の前にバスタオル一枚のシャルルが立っていたんだから。

「・・・そ、そのままだと風邪引くぞ？」

「う、うん」

その言葉にシャルルはシャワールームに戻っていった。動揺しながらも相手を気遣えた自分を褒めてやりたい。
・・・さて、どうするか。いきなりシャルルの過去バナ聞くことになったわけだけど・・・。
俺はそれを聞いて彼女にちゃんとした言葉をかけてあげられるんだろうか。いやたぶん無理だろうな。
でも一夏の言葉を真似るなんてこともしたくないし。

「（だったら俺は・・・）」

シャワールームから戻ってきたシャルルにベッドに座るよう促す。

「涼太・・・その・・」

「・・・早速なんだけどなんで男装なんてしてたのか、話してくれないか？」

俺は、俺自身の言葉で思っていることを伝えてみようと思う。

ｓｉｄｅ　シャルル・デュノア

「・・・早速なんだけどなんで男装なんてしてたのか、聞かせてくれないか？」

涼太は真剣な表情で僕に聞いてきた。たぶんこの話をしたら涼太に嫌われると思う。でも僕は話さないといけない。彼をだましていたんだから。

「うん・・。昨日僕がデュノア社の社長の子だってゆう話をしたよね？その社長、父の命令でね。このＩＳ学園にきたんだ」

「・・・」

「僕はね涼太、父の本妻の子じゃないんだよ・・。父とはずっと別々に暮らしていたんだけど、二年前に引き取られたんだ。お母さん

がなくなったときデュノアの家の人が迎えにきてね。それで色々検査を受ける過程でＩＳ適正が高いことがわかって。それでテストパイロットをやることになって、でも父にあったのはたったの二回だけ・・・」

「・・・」

涼太はなんの反応もなく僕の話を聞いている。そうだよね、僕の昔話なんて興味ないよね・・・。

「その後にね、経営危機に陥ったんだ。デュノア社も第3世代型の開発に着手をしているんだけどなかなか形にならなくて。それで僕が男のふりをすることになったんだ」

「俺と一夏のデータを取るために？」

「うん。それと注目を浴びるための広告塔って意味もあるかな。はぁ・・ホントのこと話したら楽になったよ。ありがとう、それと今まで嘘をついていてごめん」

ふぅ。もうこの学園ともお別れかー。二日間だけだったけど楽しかったなぁ・・・。

「それで？シャルルはこれからどうすんだ？」

うん？なんでそんなこと聞くんだろう。涼太の考えていることがいまいちわからない。

「どうって、女だってことがばれたから本国に呼び戻されると思う。良くて牢屋行きかな」

僕の言葉を聞いて涼太はなにかを決心したように僕に向き直り、話し始めた。

「うん。話を聞いていてこれから俺の思ったことを言うけどシャルルが嫌な思いするかもしれない。だから先誤っとく。ごめん」

いきなり涼太に誤られた。な、なんで？このあと言われた涼太の言葉によって僕はさらに混乱することになった。

「それじゃ遠慮なく。・・・お前の親父ってさ、最っ低の糞ヤロウだな」

「・・・・え」

「だってそうだろ？奥さんいるのによそで女抱いて、子供まで作って、挙句の果にその子供まで自分のために利用する。生きてる価値すらねーだろ。同じ男として恥ずかしいわ。俺がお前だったら――――――」

・・・なんでこうなったんだろう。目の前で僕の父親がものすごい勢いで罵倒されてる。ソレに対しては別になんともおもわないけど、と、とりあえず止めないと！

「だいだいなんでそんなやつが社長やってんの？もう他のやつｔ「ちょ、ちょっとまって！」・・どした？」

涼太が僕のために怒ってくれたのは予想外の出来事だったけど、その前に聞かなくちゃいけないことがある。

「そ、それ以外になにか僕に言うこととか、ないの・・？」

「・・・それ以外って？」

「だから、その・・僕、涼太をだましてたんだよ？」

「うん、そうだな？」

そうだなって・・・。ホントにわかってるのかな涼太は。

「わかってるよ」

え・・・・？

「男友達だと思ってた奴が実は女の子でした。なんてたしかにびっくりしたけど、それだけだろ」

だけど本当は涼太はちゃんと僕の言いたいことをわかってくれてて、

「データを取るために近づいてたってのはちょっと悲しいけど、ソレ抜きにしてもシャルルがいい奴だってことは十分わかってるから」

その上で僕のことをちゃんとみてくれてて、

「俺にとってはだまされてたってことより、大事な友達がいなくなることのほうがよっぽど大事件だ」

だましてた僕のことを今でも友達だって言ってくれて、

「だからここにいろよ。シャルルが少しでも悪いって思ってるならここにいろ！」

僕に居場所を作ってくれようとしてくれてる・・・。涼太は本当にやさしい人だね。・・・でも、

「でも、僕がここに居たいって思っててもきっと本国から帰還命令が・・・」

「それは大丈夫！・・・だったような、ちょっとまっててくれ」

涼太がバックをあさって何かを探し始めた。そして手に取ったのは・・・生徒手帳？

「あ、あったあった！ほら、ここ読んでみ？」

手渡された生徒手帳の開いてあるページを読んでみる。

「えーと？ＩＳ学園特記事項。本学園の生徒は、その在学中においてありとあらゆる組織、国家、団体に既存しない・・？」

「ほらな？いやぁ一夏はすげぇな。こんなの５５個も覚えてるなんて・・さすが主人公は各がちがった」

つまりここにいる間は大丈夫だってことを言いたいのかな？それなら・・・。僕はさっき涼太が言ってくれたことをもう一度だけ聞いてみた。

「涼太、僕ここにいてもいいのかな・・・」

涼太は僕のその言葉に笑ってこう答えた。

「あたりまえだろ？むしろ逃げたら許さねーから」

この言葉がうれしくて僕は涼太の手を取った。

――――――――――――――ありがとう、涼太。

君にあえて本当によかった。

side　涼太

目の前で笑っているシャルルを見るとどうやらうまく言葉を伝えられたようだ。途中自分の言葉で恥ずかし死にするかとおもったが。もうこんなことぜったいやらない。

それにしてもシャルルさんはなぜ俺の手を握っているんでしょうか・・。まぁ全然いやじゃないからいいんだけどさ。むしろ嬉しいけどさ。

―――トントン

「涼太、シャルル、おれだけど、飯くいにいかねーか？」

ドアをノックする音の後に一夏の声が聞こえてきた。タイミング悪すぎだろ・・・。俺はシャルルをベッドに寝かせ、ドアを開ける。

「お二人とも夕食はまだでｓ・・・シャルルさんはどうかしたんですの？」

いや・・・その言葉そのままお前らに返す。

「シャルルはちょっと体調がわるいらしくて寝かせてたんだ。それより一夏、お前両手に花だな・・・」

一夏をはさむように女二人―セシリアと箒―が両腕に組みついていた。それどんなエロゲ？

「アハハハ・・・まあな・・。それよりシャルル、大丈夫なのか？」

「う、うん。ゴホッゴホッ。ダイジョウブー」

えぇ・・・。演技下手すぎだろ・・・。

「そうか・・・。しっかり休んで早く直せよ？」

えぇ・・・。だまされてるぅ・・・。

「ま、まぁそうゆうことだから俺はシャルルを見てるよ。夕食は三人で行ってこい」

俺の言葉に一夏は渋々女二人を連れて食堂に歩いていった。また二人だけになる。

「それにしても一夏ほんともてるよな。爆発すればいいのに」

「爆発！？で、でも涼太もクラスの女の子に人気あるじゃない」

そうなのか？俺人気あるのか？まじかよ、テンションあがっちまうじゃねーか。

「そうか・・・俺もリア充だったのか。なんかごめんな一夏、俺お前のこと言えねーみたいだわ」

「（なんか遠く見ながら独り言つぶやきだした・・・）」

どんどん涼太のことがわからなくなっていくシャルルであった。

「シャルル、今の俺は機嫌がいい。飯を取ってきてやろう。なにがいい？」

「え？あ、うん。それじゃあ涼太と同じものでいいかな？」

「任された」

そのあと食堂でオムライスを二つもらってきた俺はシャルルと楽しく夕食を取った。

あ～んイベントとかすっかり忘れていたのは内緒だ。

第7話　新しい風（前書き）

7話目です。

第7話　新しい風

第7話　新しい風

「先生、すいません！」

放課後、イの一番で職員室にやってきた俺は、座っている織斑先生の前で頭を下げた。

「いきなりなんだ？なぜ私がお前に謝られる」

「その、ですね。実は――――――」

俺は昨日繰り広げたリアル鬼ごっこの件を打ち明けた。ラウラに怪しまれてしまった以上俺が監視を続けるのは難しいだろうことをふまえて。

「なるほど、そうゆうことか」

なぜか話を聞き終えた織斑先生は小さく笑っていた。そうゆう態度されると逆に怖い・・・

「別に謝るほどのことじゃない。とゆうより伊波が素直に私の頼みごとを聞いてくれていたことに少し驚いた」

なに言ってんのこの人？凶器振り回してお願いとゆう名の脅迫してきたの誰だし。まぁそんなこと言える勇気俺にはないんですけどねっ！

「でもそれも昨日の件のおかげで果たせなくなりましたけどねー」
「そもそも軍人であるアイツがお前の尾行に気づかないはずがないだろう」
いや、今冷静に考えてみればそう思うけどさぁ、こっちはアンタの殺人チョップ受けたくない一心でがんばってたんだぞコラ。
「まぁその件についてはもういい。ボーデヴィッヒには私からそれとなく釘を刺しておく」
最初からそうしろや！とは言えない。おとなしくそうですかと返事をした。
「話は終わりか？私はこれから第3アリーナを監督しなければならない、なにもないならもう行くぞ」
先生は時間を気にしながらそういって席を立った。丁度いいことに俺もそこに用がある。
「俺もいまから一夏達とアリーナで特訓なんです。」
「ほう。自主訓練とは熱心なことだがアリーナでは絶対に問題を起こすなよ？責任を取らされるは私なんだからな」
「そんなこと言われなくてもわかってますって！」
自信満々にそう答えた俺だったが、先生はそんな俺を見て大きくため息を吐いた。何故だ。

＊

俺と織斑先生がアリーナを目指し校庭を歩いていると、ふと妙なうわさをしている女子生徒たちの会話が耳に入った。

「ねぇねぇ聞いた？転校生のこと」

「あぁ１組の？たしか、転入早々織斑くんのこと叩いたんだよね？」

「そっちの子じゃなくてぇ、３組に専用機持ちの女の子が転入してきたんだって！最近多くない？転校生」

シャルルとラウラ以外の転校生？それに専用機持ち？気になった俺は織斑先生にその件について尋ねてみた。

「あの、先生。３組にまた転校生がきたとか？」

「ん？あぁその話は私も３組の担任の教師から聞いている。たしか名前はノア・オーランド、カナダの代表候補生だそうだ」

聞いたことのない名前だった。自分がしらないだけで原作にいるキャラクターなのか、それとも自分と同じ”オリジナル”なのか、ココに来て出てきた不安要素に俺は戸惑いを隠せなかった。

どちらにせよこれから原作知識が役にたたなくなることは明白だ。

なんてこったい・・・。

「おい伊波、アリーナでなにかあったらしい。急ぐぞ」
頭を抱え、唸っていると織斑先生が話しかけてきた。周りにいた生徒達も第3アリーナに向かっているようだ。
うわさの転校生のことは今度ゆっくりかんがえることにして今は走り出した先生を追いかけよう。俺達は全速力で第3アリーナを目指した。

＊

アリーナに着いた俺達が目にしたものは地面に倒れたセシリアと鈴、それにラウラと対峙する一夏とシャルルの姿だった。
「おい！セシリア、鈴！大丈夫か！？」
気絶している二人に駆け寄り、即座に黒鉄を展開。二人を両手で抱き上げ安全な場所まで撤退する。しかし、
「涼太！危ない！！」
戦っていたはずの一夏が唐突に叫ぶ。その声に振り向くと二人の攻撃をかいくぐり俺を撃墜しようと接近するシュバルツェア・レーゲンの姿。
「きさまぁあああああ！！！」

あきらかに俺に対して怒りをむき出しにしているラウラ。やばい、目が血走っている。あれ絶対昨日のことを根に持ってるだろ。俺は抜刀して抵抗しようとするも現状を思い出し盛大に取り乱した。

「（うおぉぉぉ！これじゃ刀ぬけねぇぇぇ！！）」

二人を投げ出すわけにもいかず、全力でその場から離脱する。しかしこの状態では黒鉄の売りである機動力をいかすことができず直ぐに追いつかれてしまう。

「（逃げ切るのは無理か！）」

撤退をあきらめ、振り下ろされるブレードから二人を守るようしっかりと抱え込む。シールド残量が切れる前に一夏達が止めにきてくれることを祈り、衝撃に備える。

———キィィィン！！

ブレードとブレードがぶつかり合う音。さすがに助けに来るの早過ぎないか？そう怪訝に思いながら俺は顔を上げた。

「だめだよ、抵抗できない相手に攻撃なんて」

見たことのない黄色いＩＳ、聞いたことのない声。その見知らぬ誰かがラウラの攻撃を受け止めていた。

「貴様、何者だ！」

「私？私はノア・オーランド。はじめまして、ラウラ・ボーデヴィッヒさん」

俺を助けてくれた黄色いＩＳの操縦者はうれしそうな声でラウラの質問に答えた。ノア・オーランドってうわさに聞いた転校生だよな？

「オーランド？聞いたことがない。それとなぜ私の名前をしｔ「なにをしているお前ら」きょ、教官！」

ラウラの言葉をさえぎるように織斑先生が目の前に現れる。さっきより明らかに機嫌が悪そうだ。原因はなんとなくわかるが・・・。

「模擬戦を勝手にするのは一向にかまわん。だがなぜアリーナのバリアーを破壊する事態にまでなるッ！」

「千冬姉、それは・・・」

「だまれ。同じ誤ちを何度も繰り返すなバカ者が」

一夏を殺す勢いで睨む先生にこの場にいる全員の背筋が凍る。さからうな、殺されるぞ。本能がそう訴えかけてくる。

「この戦いの決着は学年別トーナメントでつける。それまで一切の私闘を禁ずる。それでいいな！」

「「「「「は、はい！」」」」」

そういい残し先生はアリーナの奥に消えていった。その後を追ってラウラがいなくなる。取り残された俺達は負傷した二人を医務室に

運ぶことにした。

＊

「さっきは助かったよ。ありがとう」

セシリアと鈴を運び終わり、なんだかんだで先延ばしになっていたお礼を例の転校生にする。

「知らない間に助けられたみたいね。まぁ、その、ありがとう」

「助かりました。感謝いたしますわ」

今では二人も意識をとりもどし医務室のベットに横たわっていた。包帯がなんとも痛々しい。

「いえいえ、皆無事でよかったよ！」

改めて彼女の顔を見る。髪は青色、側頭部の片側のみで結んだサイドポニー。顔は少し幼め、目は髪と同じ青色で一夏ヒロインズに負けないくらい可愛いと思う。

「私の名前はノア・オーランド。今日ココに転入してきました！皆よろしくねっ」

その言葉に一人一人自己紹介をしていく。最後の俺が自己紹介し終

え握手をした後、自然な動作で耳元に顔を寄せた彼女が俺にこうつぶやいた。

「これからよろしくね？もう一人の転生者さん」

「なっ・・・！」

いきなりの爆弾発言に俺はおもわず声を上げてしまった。皆が怪訝そうにこちらを見る。

「それにしてもさっきはなんであんなことになったの？」

ノアが何事もなかったかのように皆に話しかけた。

「え！？い、いや、それはー・・・」

「ま、まぁ色々ありますのよ！色々！」

明らかに動揺しているセシリアと鈴を見て含みのある笑みを浮かべるノア。わかってて聞いてるだろお前・・・。

「ねぇ涼太。あの子になに言われてたの？」

頭を傾げながらシャルルが俺に尋ねてきた。他の奴はノアの発言に気を取られてそっちに耳を傾けている。

「え。い、いや？別になにも？」

「・・・へぇそっかぁ、僕には話せないことなんだ？」

なぜか不機嫌になるシャルル。そうだよ話せないことなんだよ・・・

「あのさシャルル、ホントに何も言われてないって。ただこれからよr『ドドドドドドドドド』しくって・・・ん？」

突然医務室全体が揺れ出す。あぁこの音、たしかこのあと女子達が一夏とシャルルに押し寄せて・・・。

「あっ、一夏くん！学年別トーナメント、私と組もっ？」

「・・・へ？」

その音を聞きノアが思い出したように一夏に声をかける。一夏はいきなりすぎてなんのことだか理解できていないようだ。

「今年の学年別トーナメントは2人1組でやるらしいんだ！だから私とどうかなぁって」

「あぁ、そうなのか。おぉ、いいよ。一緒に優勝目指そうぜ！」

「やったー！」

「ちょ、ちょっと！」「まてまてーい！」

快くペアを引き受けた一夏に抗議の声を上げるセシリアと鈴。それと同時に医務室のドアが勢いよく開け放たれた。

———バァン！

「これ見て、織斑君！ペア、私と組もう！？」

「私とくんでー、デュノア君！」

一斉に駆け込んできた女子達が我先にと一夏達に群がっていく。

「あ！伊波くん！私伊波くんと組みたいっ！」

その中でも少数だが俺とペアになりたいとゆう女の子達が俺に駆け寄ってきた。この子達超可愛いんだけど。うへへ、どの子にしようかな。

「悪い、皆！俺はこの子（ノア）とペア組むからあきらめてくれ！」

「「「「えぇえええ！！」」」」「一夏さん！！」「いちかー！」

大ブーイングを受ける一夏とノア。ノアの方はそんなのお構いなしと一夏の腕に抱きついている。・・・できるな、この子。

「デュノア君は！？もう決まっちゃってたりするの？」

「え、えーと・・・」

シャルルは女子達に若干引きながら戸惑っていた。あいつも大変だなぁと人事のように思っていると、シャルルと目が合い、なにかを決心したように喋りだした。

「そ、その、僕は・・・涼太と組むから。ね？涼太」

――――！？

そ、そうなのか？
突拍子のないことを言い出した本人を凝視する。すごく不安そうな顔でこちらをうかがっていた。・・・ふむ。

「そうそう、シャルルとペア組もうって約束してたんだ。皆ごめんねー」

俺の言葉に花の咲いたような笑みを浮かべるシャルル。そうだよな、万が一女ってばれたら困るもんな。少し配慮が足りなかったかと反省する。

「そっかー、まぁ他の女の子と組まれるよりはいいか・・・」

シャルル・俺と組みたがっていた女子達は一夏組をみながらそうつぶやいて去っていった。

「ありがとう涼太！僕と組むって言ってくれて！」

「おkおk。むしろシャルルとペアなんて心強いな！」

「ホントにっ！？僕がんばるよ！」

なんか原作とずれまくってるけど・・・まぁ、いいか。

「ちょっといちかー！私と組みなさいよぉ！」

「織斑くん！わたしがんばるから、だから！！」

「お願い織斑君！私と組んでくださいっ！」

「一夏さん！私が一番、一夏さんのバトルスタイルと相性がいいと思いますの！だから私をペアに！」

「だ、だめだって！一夏くんと組むのは私だよっ！？」

「シャルル、涼太！助けてくれぇ！！」

・・・ラウラの件はノアがなんとかしてくれるだろ。たぶん。

第7話　新しい風（後書き）

カナダなのはなんとなく他の候補生とかぶらないかなぁと思って。

第8話　必要とされるために（前書き）

今回は少しシリアス入ります

第8話　必要とされるために

少女はいつもひとりだった。

家では両親ともに朝早くから夜遅くまで働いていて顔を合わせることがなかった。朝起きるといつもテーブルの上に1万円札と、一言いってきますと書かれたメモだけが置いてあった。

学校ではみんなから”空気”といわれ誰に話しかけても無視された。教師はいじめを知っていたがそのことについて触れることはなかった。

そんな日常でも少女には楽しみがあった。本だ。

———本は良い。いつでもいろんな世界に連れて行ってくれる。それに本は私を拒絶しないもの。

家でも学校でも暇な時間はすべて読書に費やした。少女は特にファンタジー小説が好きだった。

時には魔法使い、時には魔王を倒す勇者になって世界を駆け巡った。

少女にはそれで十分だった。いつか、いつかきっと自分を必要としてくれる人が現れる。だからそれまでは本の中で生きよう、そう心に誓っていた。

＊

ある日の夜、寝ていた少女は聞こえてきた怒鳴り声に目を覚まし一階のリビングを覗き込んだ。

「ちょっと待てよ！いきなりそんなこと言われても・・・。訳を言えよ！！」

「嫌になったのよ、毎日毎日働くだけの生活に！貴方だってそうおもってたでしょ！？」

案の定、父と母が言い争っていた。最近はあまり見なかったが、共働きをはじめた頃はよく深夜に怒鳴りあっていた。今度は何で喧嘩してるんだろう。

「俺はそんなこと・・・。今まで3人でなんとかやってきたじゃないか！なのにいきなり離婚だなんて」

———離婚。

少女はその言葉を聞き、ただ呆然と立ち尽くしていた。

両親とはほとんど顔をあわせることがなかったがそれでも少女にとっては唯一の話相手だった。たまにとれた休日の日には3人でどこかに出かけたりもした。そこに唐突すぎる離婚話。まるで世界が少女を嫌っているようだった。

「だ、だいたいあの子はどうするんだよ！まだ中学生なんだぞ！？」

話は少女の話題になる。唖然としていた少女もその言葉を聞き、我に帰る。

「知らないわよっ！そんなに心配なら貴方が育てればいいじゃない

！」

「ふざけるなよ！俺だってそんな余裕ねえよ！離婚を言い出したのはそっちだろ、お前が育てろよ！」

「（っ・・・！）」

少女は目の前の光景が信じられなかった。否、信じたくなかった。離婚を反対していた父親までもがいつの間にか自分を引き取りたくないとゆう話をしだしていた。両親の言い争いを聞きながら少女は思い知らされる。

「（そっか。私を必要だって言ってくれる人なんていないわけなかったんだ・・・ハハハ・・）」

乾いた笑みをもらし、家から靴も履かず飛び出した。
どこへ向かうわけでもない、ただこの日常から逃げ出したかった。

＊

少女は気がつくとどこかのビルの屋上にいた。無意識にここにきていたとゆうことは、そうゆうことなんだろう。

「・・・死のう。もうどうでもいいや」

夜の街を一望しながら、少女は３０階ものビルから身を投げ出した。

第８話　必要とされるために

「それじゃ、そろそろ始めよっか！」

一夏とノアはアリーナに来ていた。一週間後に控えたトーナメントに向け、特訓しようとゆう話になったのだ。

「了解！こい、白式！」

「わぁ！やっぱりかっこいいっ」

一夏の声に答え、白式が展開される。それをノアは目を輝かせながら見ていた。

「ノ、ノア？試合はじめるんじゃないのか・・？」

引き気味に答えた一夏にノアは本来の用件を思い出す。

お互いの技量を測るための練習試合。それが二人が今日ココに来た理由だ。

パートナー同士相手の良し悪しをわかっていない状態でコンビネーションなんてあったもんじゃない。

そう、これは私闘じゃない、必要なことなんだ。ノアが一夏をそう言い包め、休日の朝からアリーナに来ていたのだった。

「（織斑先生だってわかってくれるよね・・・）」

少し不安なノアであった。

「よしっ。暴れるよ、ライトニングバニッシュ！」

勢いよく掲げられた左腕が光を帯び、黄色い装甲がノアを包む。起動させたＩＳの左手には巨大な鎌が握られていた。

「一夏くんにいいとこみせなきゃね」

笑顔でそういったノアだったが、その瞳は決意に満ち溢れていた。

「でけぇ・・・」

一夏は初めて真近でみたノアのＩＳに圧倒されていた。一夏がでかいといったのは機体のことではなく左手に握っている大鎌のことである。

ゆうに2メートルを超えているそれをバトンのように振り回すその姿は圧巻の一言に限る。まるでサーカスを見ているようだった。

「ではでは、試合開始ー！」

「うおぉおおおお！！」

ノアのその言葉と共に一気に接近を試みる一夏。試合開始直後の瞬間加速（イグニッションブースト）。

涼太が使っていた戦術だが、スペックで劣る白式には相手の虚をつけるほどのスピードが出せなかった。

いきなりの奇襲に驚いたノアであったが、振り上げられた剣を防ぐにはどうにか間に合いそうだった。
間合いを詰め斬りかかって来た一夏を大鎌で受け止める。そのまま鎌を突き出し、一夏を弾き飛ばした。

「くっ・・・！」

後方に飛ばされた一夏は、体勢を整え剣を握りなおす。一度防がれたぐらいで弱気になるな。自分にそう言い聞かせ、再度剣を振りかぶった。
そして間合いに入った瞬間、一夏は思い切り剣を振り下ろした。完璧に決まったと思った。しかし、実際は振り下ろした剣が空を斬り、前のめりに体勢を崩していた。

「き・・・消えた・・・？」

「せいやあああ！！」

そう思っているのも束の間。後ろから聞こえた声に、急いで振り返ろうとするもノアの斬撃が背中に決まり大きくシールドを削られてしまう。
薙いだ鎌を返しさらに斬りつけようとするノアを蹴り飛ばし一夏はなんとか難を逃れた。
開始時と同じ位置に戻る二人。片や余裕の笑みを浮かべ、片やこのままではまずいと冷や汗をかいていた。

「今のはなんだったんだ・・・？」

「バニッシュメント。一時的に光を屈折させて機体を見えなくさせ

るカナダの誇る第三世代型兵器だよ」

一夏の疑問にノアは律儀に答えた。その言葉に一夏は以前戦った相手のことを思い出す。

「見えない兵器ってたしか鈴の龍砲もそうだったよな？」

「う・・・た、たしかに中国の兵器にもそんなのあるけど、バニッシュメントはそれだけじゃないんだからっ」

そういってノアは鎌を振りかぶり一夏に急接近する。それを迎え撃とうと一夏は剣を横に薙ぎ払う。

するとノアは消えてなくなった。

「くそ、またかっ！？」

「ちがうよ！」

声の聞こえたほうを向くと開始時の場所にいるノアを見つけた。

「・・・え。なんで？」

「今のは幻影。こんなこともできるんです！さすがカナダ！」

ノアが胸を張り、得意げに母国を自慢する。ない胸を強調しているその姿は実に微笑ましかった。

「でもそんなこと教えちゃっていいのか？負けて後で文句言うなよ？」

「言わない言わない。それにこの試合はお互いの力を見せ合うためのものだって言ったでしょ？」

「あ・・・」

ノアの言葉に本来の目的を今更思い出す一夏だった。

「お、ｏｋｏｋ。それなら俺と白式の力も見せないとな！」

そう言った一夏を金色のオーラが包み込む。ノアはその光景をみて小さくつぶやいた。

「零落白夜・・・」

「あれ、知ってたのか？」

「え、あ、あぁうん。一夏くんと白式は有名だからね！」

明らかに動揺しているノアに疑問を抱くことなく、一夏はノアの苦し紛れの説明に納得した。

「それじゃ、いくぜ！」

そして、再び試合が始まった。

＊

ｓｉｄｅ　ノア

結果から言うと私が勝った。
やっぱりまだ一夏くんは零落白夜の使いきれてないみたいで、ひたすら回避していたら勝手にシールド切れになり試合終了。
なんとも締まらない終わり方だった。

「一夏くん、お疲れ様ー」

「お疲れ、やっぱりまだ全然ダメだなぁ俺・・」

模擬戦を終えた一夏くんは少し落ち込んでいた。あれ、こんなはずじゃなかったんだけどなぁ・・。

「大丈夫だよ！一夏くんならすぐ強くなれるよっ」

こうゆうとき自分のボキャブラリーの貧相さを恨めしく思う。もっとうまくいえたでしょ私・・・ｏｒｚ

「あはは、ありがとうノア。それにしてもノアは強いな」

一夏くんの言葉に自分の顔が赤くなるのを感じる。まったく私はどうしてこんなにも単純なんだろう。

「そ、そんな。私なんて全然・・・」

「そんなことねえって！ノアは十分強いよ。ノアとペア組めてホントラッキーだぜ」

その何気ない一言に泣きそうになる。自分が期待されている、そう思うだけでうれしくなった。

「ひぐ・・・・えぐ・・・」

「ノ、ノア!?何で泣いてるんだ!?」

「・・・・いちか・・くん、ひっぐ・・・」

「ど、どうした?」

「わたし・・いちかくんの、ひっ・・役にたてる・・?」

結局泣いてしまった私は一夏くんによくわからない質問をしてしまった。困らせる気なんてなかったのに。

そんな私に戸惑いながらも一夏くんはこう答えてくれた。

「もちろん!俺一人じゃ絶対優勝なんて無理だ。ノアの力が必要だよ」

「ふ、ふえええぇん!」

もう限界だった。ずっと言われたかったその言葉に私は今までのことを思い出し、盛大に泣き出した。

突然抱きついた私に一夏くんはパニックを起こしていたけど、少したつと私の背中をなでてくれた。

いつまでそうしていただろう。かなり長い時間だった気がする。

気がつけばもう外は暗く、寮に帰ろうとゆうことになった。

部屋まで送ってくれた一夏くんにまた明日と手を振り、私は部屋に戻った。

ベットに潜り、今日あったことを思い出しながら小さくこうつぶやいた。

「神様、ありがとう」

＊

ビルから飛び降りた少女が目を覚ますとそこは何もない白い空間が広がっていた。

「おはよう、お嬢さん」

その声に振り向くとそこには二十歳くらいの若い男性が立っていた。

「え、えと、貴方は・・？それと、ここはどこですか？」

自分はビルから飛び降りて死んだはずなのに、そう少女は思っていると目の前の男性はこう答えた。

「僕は神。ここは、んーそうだね。生前の世界と死後の世界の狭間ってとこかな」

男性はそういいながら、自分の背中を少女に見せる。それを見て少女は驚愕した。なぜなら男の背中に翼が生えていたから。

「普通死んだ人はそのまま天国に送るんだけどね、君の人生見てかわいそうだなって思ったんだよね」

神と名乗る男の言葉に少女は苛立ちを覚えた。確かに自分は不幸だったかもしれない、だけど他人に同情される筋合いはない。

「でね？不憫に思った神様は哀れな人間を救済しようと考えたわけだよ」

わざとイラつかせる言葉を選んで話す神に、怒りを爆発させそうになる少女だったが、それではいつまでたっても話が進まない。静かに相手の話を聞くことにした。

「おろ？さすがに怒ると思ったけど、意外と思慮深いんだね。」

「それで？心優しい神様はどうやって私を救ってくださるんですか？」

怒りを抑え切れていない少女の言葉に満足そうに神は笑う。

「あはは、やっぱり怒ってた。おkおk、僕の考えたプランはこうだ」

神は人差し指を立てながら、こう続けた。

「――君を大好きな本の世界に転生させてあげよう」

夢のようなその言葉に少女は胸躍るのを感じた。

「ほ、ホントに？」

「あぁ。だけど物語はこっちで選ばせてもらうよ？」

「うん！」

さっきまで生気を帯びていなかった少女の目が、今では輝いていた。その様子を見てさらに笑顔になる神。

「転生先はＩＳ（インフィニット・ストラトス）。知ってるよね？」

「し、知ってる！」

それもそのはず最近少女のはまっていた小説がソレだった。欲を言えばもっとファンタジーな物語がよかったが、この際なんでもいい、さっさと行かせろ。少女の目がそう訴えていた。

「まぁまぁ、落ち着いて。その世界で君は好きなように生きるといい。原作に介入するもよし、しないもよし。君の追い求めていた”自分を必要としてくれる相手”を探すもよしだ」

最後の神の言葉に目に見えて落ち込む少女。やはりまだ両親の件を引きずっているようだった。

「私を必要としてくれる人なんて見つかるのかな・・・」

「それは僕でもわからない。でもこの僕が直々に助けてあげるんだ。そのくらいして貰わなきゃこまるな」

身勝手な神の言い分に自然と笑みがこぼれる。相変わらずいい人なのか嫌な人なのかわからないと少女は思った。

「私、がんばってみます！」

「うん、がんばって。あ、そうそう、言い忘れてた。もう一人その世界に転生させる予定だから、よろしく」

その言葉をあまり気にしないで聞いていた少女だったが、後に少女の話を聞いた少年が『俺と全然待遇が違うじゃねぇか！！神、でてこいよぉおお！』と憤慨することを今の少女は知る由もなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2983z/

とある男のＩＳな話

2012年1月14日04時48分発行